

犠牲祭で実家に帰る（盛大な伝統文化）

イスラム教徒にとって犠牲祭は最も盛大なお祭りの一つだと考えられている。バマコやその他の主要都市に住むマリ人が実家に戻って家族とともに祝う行事である。自らのゆかりの地への帰還は、人によっては、社会的・神秘的な意味合いを持っていることもある。そのような意味合いがある旅行であるため、最低限の準備は必要である。

交通機関はラッシュに備えている。一週間前から既に首都から地方に向かう長距離バスは満席である。席の予約は通常の3倍以上で、ある会社などは交通運賃の値上げすら行った。

三十代の主婦であるドゥスバ・ジャラさんは毎年キタ区のムウドジャへの旅行に向けて熱心に準備している。犠牲祭を祝いに生まれ故郷に彼女を帰らせる理由は、マリにおける犠牲祭の奥深い意味のためだ。彼女は、三日間地元で犠牲祭をお祝いすると、村中が歓喜の輪に包まれるから、地元で犠牲祭をお祝いするのが好きと幸せそうに語ってくれた。

首都のお祭り行事は、犠牲祭の日でも数時間で終わる。後の時間は、伝統的な挨拶をしたり、隣人へ許しを乞うたりするのに割かれます。

また、ドゥスバ・ジャラさんの犠牲祭の間の予定は以下の通りとなっている。キタでの犠牲祭初日は、ジャラさんの義理の姉妹がその日の主な仕事を行う。彼女たちは朝早くお風呂用のぬるま湯を配る。これはジャラさんの妹たちが、姉の夫に対する心使いを表している。ジャラさんの妹たちが様々な種類の料理を準備することも同じ意味である。

帰省している間、大家族は世代同士で集まり、庭の隅で食事をとります。午後の予定は、親の世代も参加するダンスコンテストにおいて世代ごとにダンスの上手い人がダンスを披露する。

ジャラさんによると、キタ区ムウルジャには、十以上のジャラ家があり、この機会に長老の庭に家族全員が集まる。各ジャラ家はそれぞれ羊一匹を絞める。

ラフィアブグのおじの家に住んでいる学生のママドゥさんの村にも歓喜が訪れている。九月二十四日（犠牲祭）の数日前から、この青年はクリコロにいる両親や友達との再会が待ちきれない。それまでの間、庭の真ん中で歌いながら洗濯をしている。彼は家族に囲まれているときに幸せな時間だと明かしてくれた。

犠牲祭に向けてたくさん人が村に戻ってくるため、仕立屋は頭を抱えている。作業場は仕事の山となっているが、皆、出発前に自分の服を新調したいのである。お客さんと決めた期限に間に合わせられないことを恐れだした仕立屋もあつたり、作業場を放棄して逃げ出してしまう仕立屋もあつたりする。

お客さんを満足させることができる量しか注文を受け付けない賢いセネガル人仕立屋もいくつかある。そのセネガル人は、我々の親類ではないというのは関係なく、我々と共通の価値観をしっかりと共有しているのである。このように、「仕立屋ベベ」で働くカッセ・ンディニュさんはダカールで犠牲祭を過ごす準備をしている。カッセ・ンディニュさんは、

このお祭りで親類と再会できる喜びを隠せないでいる。「私は2009年からバマコにいますが、犠牲祭のたびにセネガルの家族のもとへ帰っている。実家で過ごすこの短い期間に幸せを感じる。」カッセ・ンディニュさんは、セネガルの外で暮らす兄弟みんなが犠牲祭を祝うために年老いた父親の周りに集まり、これは私たちの伝統だと述べた。犠牲祭のときに我が家に帰ることは、習慣以上の意味を持つ。

犠牲祭とは、現代社会によって、昔の大家族がばらばらになってしまった遠く離れた家族が数日間一堂に会して家族の絆を維持できる1つの伝統でもある。

Diadji DIARRA